

日本での生活は、いかに私の一神教理解を変えたか

バーバラ・ブラウン・ジクムンド (Barbara Brown Zikmund)

1. イントロダクション

昨年6月に行なわれた CISMOR のセミナーで講演したときにもお話ししましたが、私はアメリカの教会史を専門とする歴史学者です。4年前までは日本についてあまりよく知りませんでした。1981年に1週間ほど日本に滞在したことはありました(東京と京都で神学教育関係の方々と会いました)が、4年前から「ミショナリー・アソシエーツ」として京都の同志社大学アメリカ研究科の教授陣に加わり日本で暮らすようになりました。大学院では日本人学生にアメリカの宗教史や生活について講義しています。学問研究の専門分野としてはアメリカの宗教、とくに一神教に焦点を当てています。

本日の講演は大まかに2つの部分に分かれています。まず、与えられた時間の大半は一神教に関わることで私が重要だと考える4つの論点を掘り下げていきたいと思えます。アメリカに住んでいたとき常にこの4点は重要だと考えていましたが、日本で暮らして4年経った今、一神教の根底にある中心的な考えにあらためて気付きました。一神教は現代世界にはあまりにも狭量で排他的な考えであると主張するアジアの学者もいますが、私は、一神教は世界に対する一つの重要な見方であると明言したいと思えます。一神教が強いときは、それによって人間社会は尊重の気持ちを保ちやすくなり繁栄します。これまで私は一神教の信者が多数を占める社会で暮らしていたため、当たり前のことだと考えていたことがいくつかあります。日本に住んでからは、私は自分の宗教観をより深く検証することができました。このような過程を経て私の宗教理解はより深く豊かなものになりました。

講演の最後の数分間は、日本の宗教と社会について私の見解をご紹介します。西欧の歴史では、一神教を信仰していない文化は劣っているとみなされています。「未開人」、「野蛮人」、「無宗教者」、「神に見放された人」などと形容されます。キリスト教伝道師は、このような人々の魂を「救う」ためにこうした人々を文明化し改宗させる責任があると信じていました。クリスチャンが、クリスチャンでない人々に福音を説くだけでなく、一神教でない文明の文化遺産や知的遺産を否定することもありました。そのうえ、

ムスリムやユダヤ教徒などの他の一神教信者を非難し、キリスト教だけに真実があると主張しています。私は日本での生活を通じて、日本の宗教について新たな認識を得ることができました。私は日本の宗教を「多神教」と形容しようとは思いません。というのも、日本人の信仰と一神教の違いは、「一つの神を信じるか多くの神を信じるか」ということではないと考えるからです。この点については後ほど詳しく説明します。

それでは、日本での4年間を通じて明確になってきた一神教に関係する4つの事柄についてお話ししましょう。まず、私は宗教研究の専門家ではないということをご理解いただきたいと思います。私は歴史学者です。それでも日本での経験のおかげで、キリスト教や他の一神教に関わる4つの事柄について理解を深めることができました。1つ目は、一神教の聖典や律法は創造物の宗教的多様性を肯定していること、そしてその多様性がいかに重要であるかということです。2つ目は、一神教の人間観がいかに社会の価値観や変革に影響を及ぼしているかということです。3つ目は、女性が権利を拡大し公的責任を担うようになるうえで一神教がいかに貢献しているかということです。4つ目は、初めは寛容（信教の自由）を推進することによって自分たちの信仰を守っていた一神教が、宗教の多元性を支持し、多宗教社会への共同参加を称賛するに至った経緯について洞察を新たにしました。

2. 聖典や律法では多様性の重要性を肯定していること

一神教の根幹をなす聖典や律法はたいへん重要だと思います。ユダヤ教、キリスト教、イスラームはいずれも起源の物語は同じです。一つの神によって創造されたすべてのものの和合というメッセージを掲げています。聖書には、ほとんどすべてを滅ぼした大洪水についての記述があります。助かったのは一人の男(ノア)とその家族だけです。この洪水の後、神はノアとその子孫に命を約束したという物語を、ユダヤ教徒もクリスチャンもムスリムもみな読んで繰り返し語っています。「虹」が共通の人類のしるしです。

私は、ジョナサン・サックス (Jonathan Sacks) の論文や著作、および近著『差異の尊厳 (The Dignity of Difference)』(2002年)の影響を受けています。サックスは英連邦のユダヤ教会衆組織である「ユナイテッド・ヒブリュー・コングリーゲーションズ・オブ・コモンウェルス(またはユナイテッド・キングダム)(United Hebrew Congregations of the Commonwealth (or United Kingdom))」の主席ラビです。サックスは、ユダヤ教徒、クリスチャン、ムスリムが唱える世界の起源についての一神教的見方は、(ギリシャ思想に基づく)西洋哲学とは根本的に異なっていると論じています。ギリシャの哲学書で

は、普遍的な権利や法を見つけて正当化するために人類が共有しているものに焦点を当てています。哲学者は、人類がいかにして共通の理性、共通の願望、または感情を認識し、社会を維持する法律を作ることができるかを明らかにしようと努めています。また、すべての人々が肯定できる普遍的な考えを見つけてその考えを主張するために、多様性を克服する方策を模索しています。

ところが、一神教は世界史と人類についてこれとは異なる解釈をしています。一神教は一つの人類という理念に端を発していますが、人間が神のようになりたいと願うと、そのような人間の傲慢さに神は深く悩まされます。聖書には神がその計画全体を中止すると書かれています。つまり、民の言葉を混乱させ、(旧約聖書にあるように)多くの部族に分裂させて地上に散らしたのです。幸いなことに、このようになっても神と人類との約束は終わらなかったということです。サククスによると、神は繰り返して「差異に寛容であれと人類に教えて」います。自分たちの仲間でない人、つまり見知らぬ人の中に神を見つけることができると、神は人類に気付かせています。「聖書に書かれた一神教とは、神は唯一無二の存在であり、このため神の臨在へと通じる門は一つしかないというものではない。その反対で、神の単一性は創造物の多様性の中に見つけられるものであるという考えである。」(p. 53)

すべての一神教の聖典には様々な形でこのメッセージが含まれています。イエスは、神がサマリア人、盲目の乞食、女性、取税人を創り出したと弟子達に教えています。彼らはみな神の子なのです。すべての人間は隣人であり、敬意を持って扱われるべきです。受け入れられるか否か、清浄か不浄、といった基準による人間の定義付けをイエスは繰り返し否定しています。イエスは、差異のあるすべての人間を神は受け入れると述べています。クルアーンもまた、アッラーは人類をただ一つの民族にすることもできたのだが、そうはしなかったとムスリムに教えています。アッラーは人類を多くの種族や民族に分ち、お互いがよく知り合うことができるようにしました。意見の相違にもかかわらず共通の真実を模索するように人類を試しているのです。(2: 51)

現実には、多様性はいたるところで見られます。無数の種があり、無数の言語が存在します。創造主である神は唯一ですが創造物は限りなくあります。一神教では、神は創造物の上にいる哲学的あるいは科学的概念ではありません。神は多様な人類の慈悲深い愛情に満ちた親なのです。神を父または親とする考え方は重要です。親は子供「一般」を愛するのではなく特定の子供、つまり自分の子供を愛するのです。そして、良い親の最も素晴らしい点は、一人ひとりの子供をそれぞれ異なる適切なやり方で愛するということです。子供はみな違いますが、良い親を持つ子供たちは、神はその違いを肯定し多様な子供たちを愛していると信じることができます。

一神教は単一性、つまり神の唯一性を柱としていると考える人もいますが、実際には一神教は単一性ではなく差異を肯定しています。神は唯一ですが、その創造物は多様性に満ちています。サククスは次のように論じています。

一神教の中心には、神は文化の細かい特徴や人間の理解の限界を超えているという考えがある。(神は)私の神であると同時にすべての(人類の)神でもある。私とは異なる習慣や生き方をしている人々の神でもあるのだ。だからといって神がたくさんいるというわけではない。それは多神教である。また、神は(神の)名のもとになされたすべての行いを認めているというわけでもない。その反対である。私の神だけでなくあなたの側にいる神は、私たち両方の上に立つ公正の神にちがいない。神は私たちに、互いにゆずり合い、互いの主張に耳を傾け公平に解決するように教えている。そのような神のみが真に超越した存在になろう。人間が用いるどの言語でも、どの視点からも理解することができる、自然界だけでなく精神的世界も超える存在である。そのような神のみが、征服や改宗という手段に頼ることなく、現実的な必要というよりもっと崇高なものとして和解することを(人類に)教えうるのだ。(p. 65)

人類史においては残念ながら、一神教は多様性の重要性を一貫して肯定してきたわけではありません。種族の同族主義に対抗して、クリスチャンは(そしてムスリムも)しばしば排他的な普遍主義を推進してきました。クリスチャンの普遍主義もムスリムの普遍主義も、神は唯一無二の存在であり、すべての人類にはただ一つの道、一つの信条しかないと主張しています。つまり、クリスチャンもムスリムも道はただ一つだと主張しているわけです。

しかしながら、一神教は必ずしも排他主義につながるものではありません。ユダヤ教は根本的には一神教ですが、一つの神が他の民族や種族にも違う形でかかわることを受け入れています。一つの神を信じると同時に、神が別の民族に別のことを求めることを肯定することが可能であるとユダヤ教は説いています。

アブラハムの3つの宗教には、信仰の実践の手引きとなる成文法や解説書や学者による伝承などがあります。ユダヤ教徒は律法(トーラー)を守り、クリスチャンは教会制度と神学上の教義に従い、ムスリムはシャリーアを重んじています。私は、聖書の不可謬性にこだわる「キリスト教原理主義者」ではありません。聖書は神を起源としていることを私は信じていますが、それを読んでいるのはその意味を必ずしも理解していない、神ならぬ人間です。夫との普通の会話でも誤解が生じることがあるので、聖書の解釈が信者の間で必ずしも一致しなくても不思議ではありません。

日本で暮らしているうちに私は、一神教においては聖典や法的慣習がいかに重要であるかが理解できるようになりました。基本的な宗教思想が書き記され、宗教学者や教師が聖典類の内容を伝えるときには、差異を理解し意義のある共同体を作るより大きな可

能性が生まれると信じています。一神教の聖典類は時として、他の宗教を信じる人々の人間性を否定するために利用されています。しかしながら、一神教の聖典類や成文法は多様性に満ちた世界において差異の尊厳を守ることも可能にするのです。

3 .一神教の人間観

また、私は日本で生活するようになってから、一神教の人間観の重要性に対して敏感になりました。儒教の伝統の影響を受けているアジアの社会は、人間の本质について非常に肯定的な見方をしています。私のアメリカ思想の講義を受けている学生の一人が儒教の考えを引き合いに出して正反対の考え方であることを教えてくれました。彼は、「アジア人は、すべての人間は善であり、より良くなること、誠実であること、正直に生きることを目指して常に努力していると信じています」と言いました。人は正しいことを教えられれば正しいことをするものです。このため、アジアの社会では教育がとても重要なのです。

このようかなり楽観的な人間観を持つアジアの社会は非常にきびしいものです。人は完全であることを要求され、誤りを犯すと厳しく責められます。何か間違いがあると教育に問題があると決め込み、当事者の人間そのものは本質的に善のままであると考えます。基準が高く、時に非現実的な期待をします。日本は、そして他のアジアの社会も、非難と恥の文化なのです。

一神教はこれとは違う文化を形成します。人間の本质については善悪入り混じった考え方をします。一方では、すべての人間は「神の姿になぞらえて」創られたもので、このため一人ひとりの人間は神聖であり神の子であると主張しています。その反面、一神教は人間の弱さについては儒教よりも現実的な見方をしています。人間は立派にやりたいと考えますが、永遠に到達することはありません。どんなに一生懸命やっても人間は失敗します。というのも一神教では、悪や利己心が常に人間の最善の行いを墮落させてしまうと考えているからです。人間は罪びとです。単に過ちを犯すという理由だけではなく、人間の愛そうとする意志は支配しようとする意志に絶えず歪められてしまうからです。人間は悪なのです。キリスト教においては、ラインホルド・ニーバー (Reinhold Niebuhr) などの神学者によると、「神ならぬもの(人間)を裁くのは永遠なるもの(良い人間)ではなく、永遠なる聖なる神が罪深きもの(人間)を裁くのである」。(*Nature and Destiny of Man*, p. 22)

一神教では、人間には善と悪の両方の性質が備わっていると考えています。弱さや悪い行いは人間の本质の一部をなしているのです。このため現実的な期待でなければなり

ません。一神教のほうの間違いに対してはるかに寛容で、過ちを許し容認してくれると思います。一神教社会の法律や政府のほうが現実的で、ごく一部の人が持っている理想的な基準に頼るのではなく、(避けられないものと考えられている)悪の影響を抑制するための社会・政治体制を整備します。何よりも、たとえ過ちを犯して犠牲を払わなければならないとしても、人間らしさに対する許容があります。

日本では「官」「民」ともに求めるものが大きく、完全さに対する強い期待があります。大きな過ちを犯してしまった人が面目を保つには自殺するしかないとも考えられます。それでもなお、過ちは起こります。不正行為もよく見られます。人間の欲と利己心が人間の善を歪めてしまうのです。日本人もアメリカ人と同様に弱く利己的で欲深くても、私は意外だとは思いません。人間だからです。ところが、日本社会は許すのではなく責める傾向があるので、人々は世をすねてしまいます。人間は完全ではないことは分かっているのですが、誰もが完全でなければならないと思っています。結局は悪が繰り返されるのを見ることになりませんが、治癒や再生の機会はほとんどありません。今お話しているこのような違いを浮き彫りにする2つの言い習わしが私の文化にあります。1つは、「そんな日もあるさ(Shit happens)」です。これは単に「悪いことは起こる」という意味です。それが人生です。そして2つ目は、「あやまつは人の常、許すは神のさが」です。この句は、私たちは神の寛大な愛を必要としている人間であるので誰もが過ちを犯す、ということ気付かせてくれます。

私の学生は次のように論じています。もし人間の本質が善と悪の両方であると人々が信じるのならば、極端な非難は少なくなります。アジア人は人間の本質が善であると信じているため、誰かが過ちを犯すと、その人間が悪いと考えるのが普通です。しかし、正しいことも悪いことも行いうるという考えを前提とすれば、人々は過ちを犯した人を遠ざけ責めるのではなく、正しい道を進むように助け合うことができるかもしれません。

まったくそのとおりです。日本で悪いことが起こると、必ず誰かが責めを負うことになります。夜のニュースを見ると、あってはならないことが起きるとその問題点に関する話と責任のありかを追及する話でいっぱいです。誤りを正すために、誰かがお金を払ったり、謝罪や辞職をしたり、あるいは何らかの償いをしなければなりません。事故が起きたり製品の欠陥が見つかったときは、人や会社が悪いとされます。誤りに対する寛容は皆無です。すべての行為や製品が正しく完璧であることが可能であり、また正しく完璧だろうと当然のように思われています。

西欧の一神教の思想家は人間の本質についてもっと現実的な見方をします。ギリシャローマの伝統の中、またアブラハムの宗教(ユダヤ教、キリスト教、イスラーム)の教

えに刻み込まれているのは、人間の本質の限界と、社会による監視および／または神の恩寵と許しの必要性に対する認識です。人間には本質的に欠陥があります。人間社会はこの事実を忘れてはなりません。

日本で暮らして4年を経た今、私は人間の本質についての一神教的理解を新たに深めることができました。儒教で想定する人間観よりも一神教の人間学のほうが健全で希望があると思います。信心深い人々が人間には本質的に欠陥があることを信じると、互いに助け合い、問題の発生を防ぐような社会の仕組みを作ります。人々が誤りを許し問題を克服して前に進むようにします。ところが、崇高な人間観を持ち、だれもが立派にやることを想定している（現実には失敗もする）社会では、問題の発生を防止し誤りを正す力が恥と非難によって制限されてしまいます。

4. 女性の権利および公的責任の拡大

日本で4年間、私はアメリカの女性に関する講義を受け持ち、学生たちの女性の役割についての理解を促進しています。女性史の研究を通じて、一神教の思想と運動はアメリカ社会の女性の発展に大きな影響を及ぼしたことが分かりました。アメリカの女性史を日本の女性史と比較してみると、一神教もその違いが生じた要因になっていると思われます。

16世紀にプロテスタント・クリスチャンの宗教改革者らは、教会の男性聖職者の教えに頼るのではなく、一人ひとりの信者が聖書を読まなければならないと主張し始めました。「ソーラ・スクリプトゥラ（ただ聖書のみ）」を頼りにするのです。このため、男性も女性もすべての人々が読み書きをし、自分で聖書を勉強し宗教的教えを理解することができるようになるべく、プロテスタント教会は多大な努力をしました。女性を対象に聖書朗読を広め、家庭での教育を重視しました。社会的役割には男女の違いがありましたが、「救い」には男女の区別はありませんでした。さらに、女性は邪悪な性衝動の危険な源、つまり「イブの娘たち」であるという古い神学的考えが次第になくなりました。アメリカではキリスト教によって崇高で理想的な女性観が生まれました。

19世紀には、立派な教育を受けた、信仰深い中流の白人女性がもてはやされるようになりました。「真の女性崇拜」あるいは「家庭崇拜」と呼ばれる理念を追求していたアメリカの男女は、女性は生まれながらに信心深く（信仰が厚く）、純潔で（性欲がなく）、従順で家庭的だと信じていました。「真の」女性は信心深く、純潔で従順で家庭的な妻として母として家になければならないと考えていました。そうすれば、子供たちを育て夫に正しい信仰と道徳心を気付かせることによって、女性が俗界の諸悪から社会

を守ることとなります。

この「真の女性」観は定型化された概念であり理想です。多くの女性はこの理想に当てはまりません。ユダヤ教徒移民やローマ・カトリックの女性たち、それにアフリカ系アメリカ人女性は外で仕事をすることが多いのです。貧しい女性たちは農場や工場で働いていました。それでもなお、女性は真の女性らしさと真の信仰を守るものだという理想は変わることなく続きました。この理想がアメリカの女性史を形成してきました。

アメリカ社会が工業化し拡大するにつれて、アメリカの女性は自分たちの社会的・政治的影響の拡大を正当化するために「真の女性」という理想を利用しました。すなわち、「家庭や信仰的価値の擁護者としての女性の役割を家庭の外へ広げる必要がある、なぜなら世間が自分たちの『家庭』だからだ」と主張しました。19世紀末には、女性は教師、宣教師、教会職員などの職につくようになりました。女性は社会の変革のために働きましたが、それもすべて「暖かい家庭」を築くためにしていると言うのが常でした。

19世紀の終わりの四半世紀には女性の公的役割が拡大しました。女性たちは、愛と奉仕は信仰心から自然に流れ出るものだという一神教の信条に基づいて、主婦や宗教ボランティアとしての私的活動から公的領域へと進出しました。その後、平等と民主主義的責任という政治的概念を付け加えました。そしてついに20世紀には、女性解放運動活動家らが男性と平等の女性の政治参加と社会的地位を主張し始めました。

一方、日本の女性の歴史を見ると別の展開を見せています。日本の過去の出来事について私が完全に理解しているかどうかは定かではありませんが、明治時代には、伝統的な儒教に基づく夫婦間、母子間の家族の力関係と国家的目標との融合があったことは知っています。「良妻賢母」という観念は、「富国強兵」の消極的な支持者として、生殖と子供の社会化における女性の役割を促進しました。ベラ・マッキー (Vera Mackie) の近著、『現代日本におけるフェミニズム (*Feminism in Modern Japan*)』(2003年) から抜粋します。

19世紀後半から20世紀前半にかけて、日本政府は女性が公の場に参加したり演説することを禁止していました。そのような公的規制が緩和されてからも、女性らしいふさわしい行動という考えが根強く残り、公共の場で政治問題に取り組もうとする女性は嘲笑的になりました。思い切って公の場に乗り込む(乗り込んだ)女性は概念上の境界を越えているとみなされました。(p. 5) ...官僚たちは、「女性の社会進出によって家庭管理と家庭教育がおろそかになる」、そして公開の会合などのような「外聞の悪い」活動に関わることによって女性の徳が損なわれると訴えました。(p. 29)

したがって明治時代には、裁縫や家事以上の教育を受けることができたのはミッションスクールに通った女性ぐらいでした。1870年代には小学校にいった女性の割合は男性の半分で、さらに高い教育を受ける女性の割合はもっと低いものでした。残念なこと

に、20世紀前半に日本の帝国主義的軍国主義的野望が強まるにつれて、女性の二次的な地位は一層ゆるぎないものになりました。

戦争が終わって新しい日本憲法が制定され、女性の社会進出を阻む公的な障害は取り除かれましたが、戦後の日本の家族は厳しい食糧難と住宅難に直面したため、女性は再び家の中に押し戻されることになりました。「良妻賢母」という古い考えも根強く残っていました。女性も選挙権を手に入れ、少数の女性は国会議員にも選出されましたが、大多数の日本の女性は男女平等だとは思いませんでした。先月、神学部の「女性と現代神学」という私の講座で、学生たち（全員女性）に、教会や社会における女性の位置付けについて記述してもらいました。「女性はどこに位置するか」という質問に対して次のように答えた学生がいました。「伝統的に女は男の下に置かれています。男は子供の上に立つべきだと言われています。この社会では、このような価値観が依然として人々の心の中に残っているのです。ただし、この学生は、「個人的には私は女も男も対等だと思います」と付け加えました。

今の日本では、男女平等という考えはまだ社会的文化的支持を欠いているようです。日本の若い女性はキャリアを目指しながらも、それと同時に女性にキャリアは無理だろうと思っています。女性の役割に関する儒教の伝統が根強く残っているのです。

一方、一神教の伝統の場合は、日本女性はもっと自立した生活を思い描きやすくなるようです。これには驚きました。というのも、ユダヤ教やキリスト教、そしてイスラームは時として女性に対して厳しい抑圧をしているからです。私は個人的にはキリスト教の男性優位主義にたいへん批判的です。それでもなお、一神教においてユダヤ教徒やクリスチャン、そしてムスリムの女性たちは、自立し、家族、社会、地域共同体に責任を持つという確固たる伝統を築いています。日本での4年間にわたる経験を経て私は、一神教が女性の役割に与えたプラスの影響について認識を新たにしています。

5. 宗教の多様性と多元性

最後の4つ目の論点は、アメリカにおいて一神教は宗教の多様性や多元性に対してどのような対応をとっているかということです。この問題の分析に際しては、ウィリアム・R・ハッチソン(William R. Hutchison)の近著、『アメリカにおける宗教の多元性：基本理念論争史 (*Religious Pluralism in America: The Contentious History of a Founding Ideal*)』(2003年)がたいへん参考になります。

ハッチソンはまず、アメリカの宗教史専門家がみな繰り返し言っていることから論じています。独立戦争以前にアメリカにやってきたヨーロッパ系移民の大半はプロテス

タントでした。ところが1800年代前半にはローマ・カトリックと少数のユダヤ教徒が移り住み、1900年までにはアメリカの宗教多様性はきわめて複雑なものになっていました。1950年代には、社会学者ウィル・ハーバーグ(Will Herberg)が、アメリカの宗教は「プロテスタント、カトリック、ユダヤ教」であると記しています。そして20世紀後半(1965年に米国移民法が大幅改正された後)には、ムスリム、仏教徒、ヒンズー教徒や他の宗教集団の大量流入がありました。主流のアメリカ宗教観は依然として一神教ですが、驚くほど多様な宗教構成となっています。ハーバード大学のダイアナ・エック(Diana Eck)教授は、その注目に値する著書、『宗教に分裂するアメリカ(A New Religious America)』(2001年)でこの発展過程について論述しています。この本には、「いかにして『キリスト教国』が世界で最も多様な宗教を持つ国になったか(How a “Christian Country” Has Become the World’s Most Religiously Diverse Nation)」という副題がついています。

ハッチソンは、宗教の多様性が宗教の多元性という概念を生んだと主張しています。様々な宗教集団がアメリカにやってきて共に暮らしはじめました。ほとんどの宗教集団が、自分たちは正しくて他の集団が間違っていると信じていました。自分たちの宗教を主流として「確立」し、他の宗教は禁止または軽視しました。宗教の多様性は危険だと感じたのです。けれども、アメリカの歴史が始まって間もない頃に、寛容(信教の自由)という概念が生まれました。アメリカ人は米国憲法に、「連邦議会は、国教を樹立し、あるいは信教上の自由な行為を禁止する法律を制定してはならない」という文言を入れました。その理由は、多様性は良いことだと考えたからではなく(そうは考えなかった)他の宗教を認めることが自分たちの信教の自由を守ることができる唯一の方法であることを知っていたからです。自分たちが生き残ることを保証するための現実的な解決策だったのです。

信教の自由という概念は急進的な考えでした。ほとんどの社会(日本も含む)の歴史において、「多様性」は危険だとみなされています。次のような分析をする法律史専門家もいます。

...世界の歴史の中でも、多様性は抑圧または阻止すべき脅威ではないと考える思想家や政治や宗教の指導者はほとんどいない。今日でさえほとんどの社会で、多様性は社会の美德であるという意見は、自殺行為ではないとしても破壊的なばかげたことだとみなされるだろう。彼らにとって寛容は、生き残るための単なる戦術であり一時しのぎの手段である。もっと進歩的な社会においてさえ、寛容は不可欠ではあるが幾分消極的な感情である...そして、多様性を寛容することは、多様性を称賛したり奨励したりすることと同じでは決してない。(Peter Shuck, *Diversity in America*, [2003], pp. 5-6)

ハッチソンによると、寛容として始まったものが、20世紀前半までには多様性を受け入れる気持ちに変わり、さらには多様性を持ちたいという願望に発展しました。21世紀には、多くのアメリカ人がたくさんの様々な形の宗教参加を促進することは良いことだと思っています。プロテスタントやカトリック教徒、そしてユダヤ教徒も、宗教の多様性を受け入れることは必要なだけでなく望ましいこととさえあるのだと考えるようになりました。(一神教に深く根をおろしている)排他的な考え方が問題となっていました。そして今、当初は実用的な必要性から擁護されていた多元性が、アメリカの一神教信者の中で民主的な概念の中心的価値とみなされています。これは驚くべき情勢の変化です。

驚くことではありませんが、誰もが不本意ながらの寛容から熱心な奨励へと変わるわけではありません。多元性を信仰に対する裏切りとみなすユダヤ教徒やクリスチャンやムスリムがいます。とくに、クリスチャンやムスリムの場合はそういう人が多いのです。彼らは自分たちが信じる宗教以外の宗教の真理主張を認めることは受け入れられないと断言しています。多元的社会に住むことになった場合に、彼らは自分の宗教に対する忠誠を妥協しなければならなくなることを恐れています。

また、宗教的多元性を熱心に奨励するには、特定の歴史的な信仰上の約束を否定し、自分の宗教を何らかの形の宗教習合に替えなければならないのではないかと懸念している人々もいます。その宗教習合は、すべての宗教は同じ神につながる別々の道とみなすものです。さらに、宗教的信念はもはや重要ではないと判断している人々もいます。

しかしながら、現代の一神教信者の大多数は、互いに尊敬し合う、押し付けがましいところのない新しい考え方を打ち立てつつあります。多文化社会についての自分たちの見解を押し付けることのできる宗教は一つとしてないことを認識しています。また、私たちは人間にすぎないので神についての人間の知識は完全たりえないという、すべての一神教が持つ見解も肯定しています。いかなる宗教も、他の宗教の真実を否定する確定的で排他的な真実を具現化していると断言することはできないと主張しています。人々は、自分たちの宗教が十分に完全で決定的なものだと言うことはできるかもしれませんが、自分たちは選ばれ、救われ、あるいは約束をかなえられたが、他の人々はみな道を見失っている、と言うことはもはやできません。一神教が提示する宗教多元的世界観は、一つの神が様々な形で人間の罪をあがない救うことが可能であることを教えてくれます。

6 . 結論

それでは、私は、アメリカの一神教に関するこのような洞察を日本での経験とどのように関連付けているのでしょうか。これは説明しにくいことです。日本の皆さんは、日本人の宗教的信仰と実践は神道と仏教と儒教の思想が混ざっていると云います。日本人がこの世での幸せを土着の霊に祈り、弔事では仏教の儀式に従い、儒教に基づく社会組織や倫理的な指針を尊重していることは確かです。一神教信者の中には日本の宗教を「重層信仰」とか「多神教」と呼ぶ人もいますが、私はそのような表現を用いたくはありません。私の考えでは、日本人の信仰はいかなる種類の「有神論」でもないのです。それは共同体や民族の忠実さによって維持されている習慣の融合です。現代日本の個人主義的な享楽的な生活においては、信仰の情熱、あるいは神学者、ポール・ティリッヒ (Paul Tillich) が「究極の関心」と呼ぶものを欠いていることが多いのです。日本の一般的な宗教はたくさんの神の崇拝ではなく、基本的には「究極の関心」を持つことを嫌がる姿勢なのです。

日本で暮らしている間、私は日本人の宗教実践の中につながりを見出そうとしてきました。実を言うとまだそれは見つかっていません。日本の一般的な宗教は、私には表面的で娯楽のように思えます。宗教的信仰は、迷信的な魔力と自己中心的な願望、そして市民による祝祭や祭りが混合したものです。倫理や道徳は共同体の習慣に根ざしていません。

平均的な日本の人々が自分は信心深くないと言うとき、ある意味ではそのとおりです。彼らは宗教的儀式を執り行いますが、私が宗教的信念と呼ぶようなものは持っていません。概して、宗教的な理由からあれが正しいとかこれが間違っているなど言うことを嫌がります。どうしたら「和」が保てるか、あるいはどうしたら自分の個人的目的にかなうか、ということを経験にして行動を決定します。神道や仏教の宗教的儀式を執り行う聖職者や神官や僧侶を尊敬していないという言葉は私は多くの人から聞きました。彼らは宗教に対して冷笑的です。そして、強い信念を持った信心深い人から宗教的発言を聞くと、その人を無礼な人だと思い、何か悪いことをするのではないかと不安になります。

それでもなお、この「無宗教」あるいは「非宗教」の文化の中で暮らすことは私にとってよい経験です。4年経ってもまだ日本語を話したり読んだりできませんが、言葉はわからなくても言語によらない部分の私の感性は高くなっています。人生の審美的面について新たに認識と理解を深めました。日本の文化は言語によらない意思表示に対してたいへん敏感です。決まった身振り、庭園、書道、生け花、茶道、食品サンプル、さらに

は、能から陶芸にいたるまで多くの芸術様式は、言葉を用いずに、あるいはほんの少しの言葉だけで表現しています。私はこれが気に入っています。というのも、宗教について「考える」以上のことをせざるを得なくなるからです。結局のところ、人生の宗教的面について語るにはいかなる人間の言語も不十分だと考えています。日本で暮らすことによって、この考えがより確かなものになりました。

日本では、日本の宗教的文献とそれに関する学者の研究書をたくさん読んでいます。神道と仏教の思想の多くは気に入っています。これらの宗教の知的伝統には敬意を表しますが、私が経験した宗教に関する対話は学者たちの意見とは一致していません。

一般の人々と話をしてみても、私は多くの日本人の宗教に対する考え方に困惑しています。彼ら自身の宗教と一神教の両方に対する考えについてです。多くの日本人は現代の一神教についてまったく時代遅れの認識をしていると思います。彼らは、宗教（とくに一神教）を信じるといことは、一つの神を肯定し他のすべての信仰や別の生き方が間違っていると批判しなければならないことだと考えています。このようなことは現代のアメリカではまったく見られません。過去にはそういうこともあったかもしれませんが、現代の多くの一神教信者は、自分たち以外は間違っているとは思っていません。ユダヤ教徒として、クリスチャンとして、あるいはムスリムとしての忠実な生き方を導いてきた唯一の神は、他の信仰の生き方も支持していると一神教信者たちは確信しています。アメリカの宗教的多元主義とともに生きている現代の一神教信者は、自分個人の信念は一つの選択であって批判ではないと認めています。もう一度繰り返させてください。アメリカの宗教的多元主義とともに生きている現代の一神教信者は、自分個人の信念は一つの選択であって批判ではないと認めています。

締め括りとして日本に感謝の言葉を贈りたいと思います。この国で暮らしている間に、一神教信者たることの意味についての私の理解は明確になりました。私は、他の宗教の信者を間違っていると批判することなく、唯一の神に対するクリスチャンとしての理解を立証することにしました。「誰もが私の意見に同意しなければならない、さもないと道を見失うことになる」とは言いません（そして多くの一神教信者ももはやそのようなことは言いません）。宣教師がかつてそう言っていたのは知っています。クリスチャンとムスリムの中には今でもそのようなことを言う人がいることも知っています。しかし私にとって神は偉大な謎なのです。神のことを完全に理解できる人は一人もいないでしょう。私たちはみな、互いを批判し合うことなく唯一の神への信仰を肯定することができるのです。